

特集にあたって

生田目 崇 (中央大学)

「思えば遠くにきたものだ」は、懐かしい歌謡曲ではありませんが、「データ解析コンペティション」は平成 25 年度で 20 周年を迎えました。20 年前といえば、まだマイクロソフトの Windows 95 や、統計分析に今やなくてはならないといえる R 言語の登場の前でした。分析はコンソール画面でプログラムを実行していましたし、気の利いたことをやろうとしたときはすべて自分でコードを書いていた記憶があります。今や GUI の整備された計算機環境で、ビジュアルな OSS の分析ツールが多数使える時代になり、隔絶の感があります。

この 20 年間で、提供するデータは量の上では 1,000 倍を超えるまでになりました。また質の面では、より粒度の細かいデータとなり、また購買履歴以外にも電力消費や金融機関の決済データといったデータが提供されたこともあります。いずれにしても、データを提供いただきました提供元企業様のご理解とご協力のもとで続けることができたことは間違いありません。

20 周年にあたる平成 25 年度データ解析コンペティションでは、(株)マクロミル様より日用品購買に関するスキャン・パネル・データを、またファッション EC サイト運営企業様からはサイトアクセスデータと購買履歴データを提供いただくことができました。なお、延べ 117 チーム、550 名超の参加を得ました。

今回の特集では、例年どおり査読付き論文の募集を行いました。8 編の投稿をいただきましたが、2 編の採録にとどまりました。これら、2 編の論文はいずれも自チームで分析目的や問題意識を定めた部門の成果です。また、EC サイトのデータについては、将来の商品閲覧および購買を予測する課題設定部門も開催いたしました。この部門で優秀な成績を挙げられた 2 チームにその取り組みを紹介していただきました。

とある関係者からは、「この分野で日本一世知辛い査読論文」という評をいただいております。厳しい査読ではありますが、論文の質を担保するためには必要な

ことと確信しております。厳しくも適切な査読にあられた査読者の皆様に感謝申し上げます。

前述したように、世の中に便利な OSS が広く普及し、究極的には「無料」で分析ができるようになりましたが、まだまだそのハードルが高いのも事実です。(株)NTT データ数理システム様および(株)KSK アナリティクス様より、分析ツールの提供ならびにツールの使用方法のセミナーを開催いただきました。分析の最初の一步で躓くチームもまだまだ多く、このようなご協力は本コンペティションのすそ野を広げるきっかけになっていると感じております。

ここ数年、ビッグデータという言葉がビジネス界を中心に騒がせています。データ基盤と分析手法がらせん構造のように互いに発展を遂げてきました。こうしたトレンドはまだしばらくは続くと思いますが、本コンペティションもこれまで以上に実データの分析分野を引っ張っていきたくと考えております。

近年では、さまざまな学会や企業でこのようなデータ分析の催しが行われるようになってきました。本コンペティションはこれらに先立つ日本での先駆者的なイベントと認識しています。本コンペティションの起源は、20 年前に本学会に開設されていた「マーケティング・サイエンス研究部会」の活動として、共通のデータを各チームで分析しようと始められたことにあります。そのときの主査・幹事でいらっしゃった木島正明先生(首都大学東京)、守口剛先生(早稲田大学)の先見の明とそのときの理念が今に続いていると感じております。また、コンペティションから本学会の「事例研究賞」を複数回推薦させていただいております。この推薦にあたっては森村英典先生(東京工業大学名誉教授)にご尽力いただきました。

今年も 21 年目のコンペティションを開催中です。ぜひご研究成果の発表をお聞きいただければ幸いです。

前号の予告においてタイトルの一部に間違いがありました。お詫びします。